

ミスエンジェルは不満を一つ一つセレナに投げつけた。

「本当の私を知らないのが一番いいことなんだよ。私がどんなに君と普通の親友になりたいのか知ってるの？でも、君と仲良くなれば、あいつらは私を孤立させるの！この間の放課後、君と一緒に帰ろうと校門の前で待っていたら、ライアンは先に帰ろうって言うし。君のことを面倒臭いなと思っているのよ」

「でも...」

「私があいつらにどれくらい君のいい所を言っているか、知っているの？」

ミスエンジェルはセレナに反論する機会をま

